3. 大学教育における臨床実習の意義と問題 —小児看護学実習—

看護学部
遠藤美根子，小口多美子，山本勝則，
板橋イク子，加藤光寶
千葉大学
内海　滉

【目的】本大学の小児臨床看護学実習上の問題点を予測し，解決策を考察する．また，学部の教育目標・カリキュラムに基づいた小児臨床看護学実習のあり方を再構築することで，今後の小児看護学教育の示唆を得る．

【方法】1，小児看護学実習での，現状にのおける問題を明確にする．2, 本学部の実習上の問題点を予測し，他大学と比較することで，問題点を明確にする．以上, 解決策を考察する上で，本学部の教育目標・カリキュラムに沿った小児臨床看護学実習目標と実習内容を再構築する．また小児臨床看護学実習のあり方を考察する．

【結果】1，小児臨床看護学実習における問題点を他大学と比較した結果，実習施設と入院患児の絶対数は充足されている．他の問題点では，その差はほとんどなく，小児特有の問題点が存在していることが明らかになった．2, 問題点の解決策ついては，学部の教育目標，カリキュラムに合わせた，小児臨床看護学実習の目標を考案し，到達することが重要である．そこで各問題を臨床側，実習指導，大学側，学生の問題点の４つに分類し解決策を考察した．

【結論】平成 21 年度からの本学の小児臨床看護学実習における問題点は，他大学とほぼ同様に予想され，今後の検討課題が明確化した．2, 小児看護学教育の講義，演習と，小児臨床看護学実習を効果的に行う上で，学習プロセスを図式化することができた．同時に実習に活用することで学習効果が期待できる．3, 教育と臨床との実習到達目標，実習指導方法について，今後，検討会を重ねる必要があり継続的教育の必要性が明確化した．

4. 周術期における口腔ケアの意義について

口腔外科学
加藤洋史，野村有希，越川久美子，角田賀子，
川又　均，今井　裕

【背景】当科では骨髄移植前，化学療法前，放射線治療前や，誤嚥性肺炎，細菌性心内膜炎のリスクのある患者を対象に口腔ケア外来を稼動した．最近，周術期の口腔ケアにより術後肺炎の減少や創部感染の減少により，術後抗生物質の使用期間と入院期間の短縮ができることが報告されるようになり，口腔ケアの重要性が注目をあびるようになった．

【目的】当科では，口腔ケア外来稼動に先立って，当科入院患者の周術期口腔ケアを２年前から導入し感染予防に努めてきた．そこで今回は，当科における口腔癌患者の周術期口腔ケアの成果について検討した．

【対象と方法】対象は 2003 年 4 月から 2007 年 3 月までの 4 年間に当科で手術を行った口腔癌患者 99 例（男性 66 例，女性 33 例．年齢 19 歳から 96 歳，平均 61.7 歳）で，術前口腔ケア導入前の 2 年間の症例と，術前口腔ケア導入後の 2 年間の症例の 2 群に大別し, 術後の体温, CRP, WBC, および術後抗生物質の使用期間と入院期間について比較検討を行った．また，誤嚥性肺炎が 70 歳以上で急増すると報告されているため，70 歳以上と 69 歳以下の 2 群に大別し同様に比較検討した．周術期口腔ケアの方法は，歯周検査，スケーリングならびに，口腔粘膜についてはスポンジブラシ等を用いて行い，患者ごとの口腔内環境に応じた清掃や指導を行った．

【結果】口腔ケア施行群では非施行群と比較し，T 分類別で T1，2 症例では術後の発熱が有意に低く, 頚部郭清術を行った症例でも CRP 値が有意に低かった．また年齢別に比較したところ，70 歳以上の症例では，口腔ケア施行群が有意に CRP 値が低かった．さらに抗生物質の使用期間と入院期間についても，口腔ケア施行群が有意に短かった．

【結論】このことから口腔癌患者において，周術期口腔ケアは，術後肺炎および，創部感染の予防に対して有効であり，抗生剤投与期間，入院期間の短縮につながる可能性が示唆された．